目で見る日本山岳写真協会の70年

The 70th ANNIVERSARY of Japan Alpine Photographers Association

J·A·P·A

日本山岳写真協会

目で見る日本山岳写真協会の70年

目　次
CONTENTS

3　発刊のご挨拶
4　カメラハイキングクラブ（CHC）の誕生
6　東京山岳写真会の創立
8　戦時中の会員消息
10　日本山岳写真協会と改称
12　会報と協会ニュースの発行
13　公募作品の審査風景
14　写真展会場の変遷
16　写真展の案内・広報活動
17　平成15年、選抜展始まる
18　一般公募展始まる
20　全国8支部の結成と写真展の開催
22　会員の個展開催と写真集の刊行
25　例会会場の変遷
26　国際山岳年写真展の開催
28　協会展と皇太子殿下
29　理事会と合同理事会
30　大好評を博した全国各地の撮影会
32　盛大に挙行された周年祝賀会
33　1年の締めくくり――総会
34　協会発行の出版物
36　会員の個人出版物
38　おちこちの人
41　日本山岳写真協会（JAPA）の歴史
47　奥付、編集後記

コラム

5　山岳写真の黎明
7　写真展事始め
9　PEOPLE①船越好文
11　先駆者が愛用したカメラ
15　PEOPLE②塚本閤治
19　PEOPLE③三浦敬三
21　昭和52年の刷新問題
24　PEOPLE④風見武秀
27　船で旅立ったヒマラヤ
31　協会のバッジとロゴマーク
33　ＴＫＩ賞の創設
35　歴代会長・副会長

表紙写真
昭和14年（1939）12月12日 於、東京赤坂
アメリカン・ベーカリー第1回創立集会

写真説明、前列向かって左から船越好文、鈴木正彦、ひとりおいて斎藤金一郎、風見武秀
後列向かって左から松本貴道、岩科小一郎、嶋村正雄

発刊のご挨拶

日本山岳写真協会は、昭和14（1945）7月、東京山岳写真会を前身として誕生しました。日本初の山の写真を撮るグループとして早くも優れた作家を輩出し、平成21（2009）年には創立70周年を迎えるまで発展しました。 このような星霜の流れは伝統を育み、さらなる発展に期待を寄せるものです。

日本の山岳写真は登山の側面から発達し、当初は記録を原点としてスターとしました。やがて創作として山を捉えるようになり、現在では山岳写真と言うジャンルの中で映像文化に大きな役割を果たしています。

本冊子は、協会創立70周年を記念してビジュアルの視点から協会の歴史を辿るものです。それぞれの時代から輩出した作家とその作品、会のさまざま行事などをアーカイブスの観点からまとめてみました。これらは私たちの協会の歴史にとどまらず映像界の側面としても貴重な記録ではないでしょうか。

ここで協会の原点を探りながら、日本山岳写真協会創立70周年の意義とその伝統の持つ重みを改めて認識して頂くことを願って止みません。

日本山岳写真協会会長　**羽田栄治**

平成21年9月11日

カメラハイキングクラブ（CHC）の誕生

昭和11年（1936）カメラハイキングクラブ（CHC）創立記念　於、神田明菓

明治末期に開幕した近代登山の成熟につれ、山の写真も、単なる記録から創作の視点からも撮られようになった。昭和も二桁、山やカメラの同好会も誕生する。昭和11年の夏、山岳映画のパイオニア・塚本閤治の提案で、山村民俗の研究家で神楽坂に住む岩科小一郎が山の写真好きな人に呼びかけた。早速、岩科のところに駆けつけて来たのは船越好文だ。そこには、早くから山の写真を撮っていた岩科の友人、内田耕作もいた。

「この指とまれ」とばかり集まって出来た会が、カメラハイキングクラブ。その年の10月のことであった。会長には、山と溪谷社の川崎吉蔵の紹介で坂部護郎がその席につく。当時「山岳写真」と言う言葉は、あまり馴染のない分野であったが、ともかく岩科、船越、内田らが中心となって会の運営を始めた。会員は100名に限定し、月例会は、神田の「キタザワ」や銀座の「ABC」で開催し、3ヶ月欠席すると除名とすると言うシビアな会であった。翌昭和12年、風見武秀は船越に誘われ、またその風見の紹介で斉藤金一郎も入会する。

主力メンバーが揃ったところで昭和13年4月14日、CHC第1回の山岳写真展を銀座の伊東屋で開催した。出展者は、塚本、坂部、川崎、当本、今井、風見、内田、嶋村、岩科、斉藤ら。

CHCは急速に成長したが、会員が増え過ぎたため、会の運営はままならず、ついに縮小を余儀なくされ、船越、風見、今井らは、CHCを退会する。そしてかれらは、翌昭和14年に次ぎなるグループ東京山岳写真会の発足の準備をする。

昭和13年（1938）第1回写真展、銀座伊東屋にて。前列左から、二人おいて、坂部護郎、川崎吉蔵。中段中央、内田耕作、後列左から二人目、風見武秀、右端上、岩科小一郎

昭和12年ごろ、フィールドで開かれたCHC撮影会でのひとこま

山岳写真の黎明

草創期の写真家では、19世紀後半から20世紀初頭に活躍したイタリアの登山家のヴィットリオ・セラの名が挙げられる。彼の代表作が昭和62年に「フジ・フォトサロン」でも公開された。セラの活動が終わり、明治38年に「日本山岳会」が創立されると、早くも山岳写真を記録から創作としてとらえる岳人も少なくなかった。山岳会会員でもある志村烏嶺の『山岳美観』（明治42年刊）は、個人で上梓した日本初の山岳写真集。翌43年になると高野鷹蔵らが中心となってまとめた『高山深谷』（明治43年より昭和16年第10輯まで続く）には、当世山岳写真家競作というべき秀作が収録されている。なお、最後に出版された第10輯には、わが日本山岳写真協会創立期のメンバーでもある穂刈三寿雄や塚本閤治らの作品も収録されている。

明治43年から昭和16年、第10輯まで続いた写真集『高山深谷』（日本山岳会編）

東京山岳写真会の創立

昭和16年（1941）7月、日本橋・高島屋にて東京山岳写真会展　風見武秀等 25名、73点の出品

昭和11（1936）年の秋、旗揚げしたCHCは急成長したが、そのため運営上の問題が浮上し、実力あるメンバーのほとんどは脱会し、残ったのは内田耕作ら数名だけとなった。同会は後に数名の仲間と東京山岳写真研究会と改称し昭和18年頃まで続く。

さて、CHCを脱会した主力メンバーはさらに飛躍し、昭和14（1939）年7月15日に東京山岳写真会を発足させる。主役となった人は先のCHCを離れた風見武秀、斉藤金一郎、鈴木正彦、小合正勝ら。

なお創立メンバーとして船越好文、中野竣陽、柴崎高陽、今井雄二、清水武甲、塚本閤治、岡田紅陽、穂苅三寿雄、馬場忠三郎が加わり、さらに袋一平、岩科小一郎、高木富次郎、内田耕作、今泉正路、永田一脩、月原俊二、川崎吉蔵、沖田虎吉、酒井菊雄、そして青森からスキー写真三人集の笹森秀雄、三浦敬三、佐藤浄も名を連ねていた。このように錚々たるメンバーのもとに、この年の12月12日、赤坂のアメリカン・ベーカリーで第1回の会合を開いた。

昭和15年、日本橋の高島屋で高木ら25名、65点を出展し、続いて16年には高島屋で参加者、岡田ら23名、出展数は73点、会の実力を写真界にアピールした。

こうした実力のあるメンバーの中でも風見、船越ら約10名の作品が日本山岳会編の写真集『高山深谷』第10輯に掲載された。

昭和十六年度作品發表

1941

東京山岳寫眞會展

七月十六日—二十六日（二十一日休日）日本橋高島屋八階

出品同人（ABC團）

馬場忠三郎　船越好文
袋　一平　穗刈三壽雄
飯山達雄　今井雄二
岩科小一郎　片柳滿
鳳見武秀　小合正勝
松本貴道　三浦敬三
宮古芳夫　門奈次郎
永田一脩　中野峻陽
荻野俊男　岡田紅陽
齊藤金一郎　佐藤淨
嶋村正雄　清水武甲
鈴木正彦　高木富次郎
塚本閑治

東京山岳寫眞會
（杉並區阿佐ケ谷四ノ九五七）

昭和16年　東京山岳写真会展　出展同人

昭和十五年度

山岳寫眞展

7月16日～20日　日本橋高島屋サロン

1940

出品同人（ABC團）

阿部芳文　馬場忠三郎
船越好文　袋一平
飯山達雄　今井雄二
岩科小一郎　鳳見武秀
小合正勝　門奈次郎
松本貴道　松永安正
三浦敬三　永田一脩
中野峻陽　萩野俊男
齊藤金一郎　鈴木正彦
嶋村正雄　清水武甲
高木富次郎　塚本閑治

東京山岳写真会

昭和16年　東京山岳写真会展のチラシ

昭和十六年度

1941

T.H.C.冬山とスキー寫眞展

期日
11月6日—15日

會場
銀座・アヲキ運動具部

主催
T.H.C.山岳寫眞部

後援
讀賣新聞社

1940
昭和十五年度

東京山岳寫眞會展

期日
7月16日—20日

會場
日本橋・高島屋八階サロン

主催
東京山岳寫眞會

後援
山と渓谷社

昭和15,16年　写真展のチラシ

写真展事始め

写真展は、いつの頃から始まったのであろうか。大正12年に日本山岳会主催で、赤坂の三会堂ビルで開かれた記録があるが、実はそれ以前の大正10年、新装なった日本橋の小西本店（現コニカミノルタ社）で開催されている。主催は「写真月報社」。

山の写真が珍しい時代であり、会場正面には「第1回山岳写真展」と大きな看板を立て、連日押すな押すなの盛況ぶり。期間中、幻燈会（スライド映写）も開かれ、慶応義塾山岳部で活躍していた槇有恒が弁士となって解説、スクリーンに映った山の大自然は観客を魅了した。コニカ展は図らずも山岳写真展の嚆矢となったのである。ちなみに会場を提供してくれた「小西本店」は、「薬種問屋・小西屋六兵衛店」を前身として明治6年に創業している。

昭和十六年度作品發表

1941

東京山岳寫眞會展

七月十六日—二十六日（二十一日休日）日本橋高島屋八階

出品同人（ABC順）

馬場忠三郎　船越好文
袋　一平　穂刈三壽雄
飯山達雄　今井雄二
岩科小一郎　片柳滿
風見武秀　小合正勝
松本貴道　三浦敬三
宮古芳夫　門奈次郎
永田一脩　中野駿陽
荻野俊男　岡田紅陽
齊藤金一郎　佐藤淨
嶋村正雄　清水武甲
鈴木正彦　高木富次郎
塚本閑治

東京山岳寫眞會
（移轉廣阿佐ケ谷四ノ九五七）

昭和16年　東京山岳写真会展　出展同人

昭和十五年度

山岳寫眞展

7月16日～20日　日本橋高島屋サロン

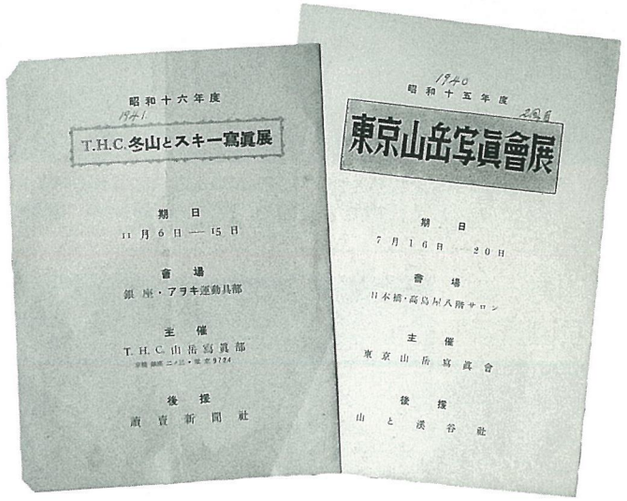
1940

出品同人（ABC順）

阿部芳文　馬場忠三郎
船越好文　袋　一平
飯山達雄　今井雄二
岩科小一郎　風見武秀
小合正勝　門奈次郎
松本貴道　松永安正
三浦敬三　永田一脩
中野萩陽　荻野俊男
齋藤金一郎　鈴木正彦
嶋村正雄　清水武甲
高木富次郎　塚本閑治

東京山岳写真会

昭和16年　東京山岳写真会展のチラシ



昭和十六年度

1941

T.H.C.冬山とスキー寫眞展

期日
11月6日—15日

會場
銀座・アラキ運動具部

主催
T.H.C.山岳寫眞部

後援
讀賣新聞社

1940

昭和十五年度

東京山岳写眞會展

期日
7月16日—20日

會場
日本橋・高島屋八階サロン

主催
東京山岳寫眞會

後援
山と渓谷社

昭和15,16年　写真展のチラシ

写真展事始め

写真展は、いつの頃から始まったのであろうか。大正12年に日本山岳会主催で、赤坂の三会堂ビルで開かれた記録があるが、実はそれ以前の大正10年、新装なった日本橋の小西本店（現コニカミノルタ社）で開催されている。主催は「写真月報社」。

山の写真が珍しい時代であり、会場正面には「第1回山岳写真展」と大きな看板を立て、連日押すな押すなの盛況ぶり。期間中、幻燈会（スライド映写）も開かれ、慶応義塾山岳部で活躍していた槇有恒が弁士となって解説、スクリーンに映った山の大自然は観客を魅了した。コニカ展は図らずも山岳写真展の嚆矢となったのである。ちなみに会場を提供してくれた「小西本店」は、「薬種問屋・小西屋六兵衛店」を前身として明治6年に創業している。

戦時中の会員消息

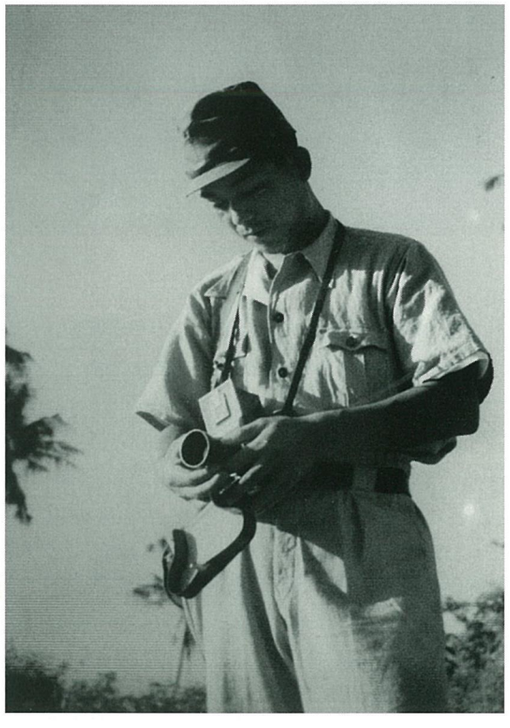
昭和18年、斎藤金一郎出征記念の集い
中央、斎藤金一郎　（風見武秀 撮影）

カメラハイキングクラブ（CHC）が結成された昭和11年、この年の2月、2・26事件。8月にはオリンピックベルリン大会。10月になると日本人初のヒマラヤ遠征、立教大山岳部がインドヒマラヤ、ナンダ・コットの登頂に成功する。しかし翌12年の7月、勃発した蘆溝橋事件は日中戦争突入への兆しを見せた。こうした時代背景の中で山の写真を撮っていた。

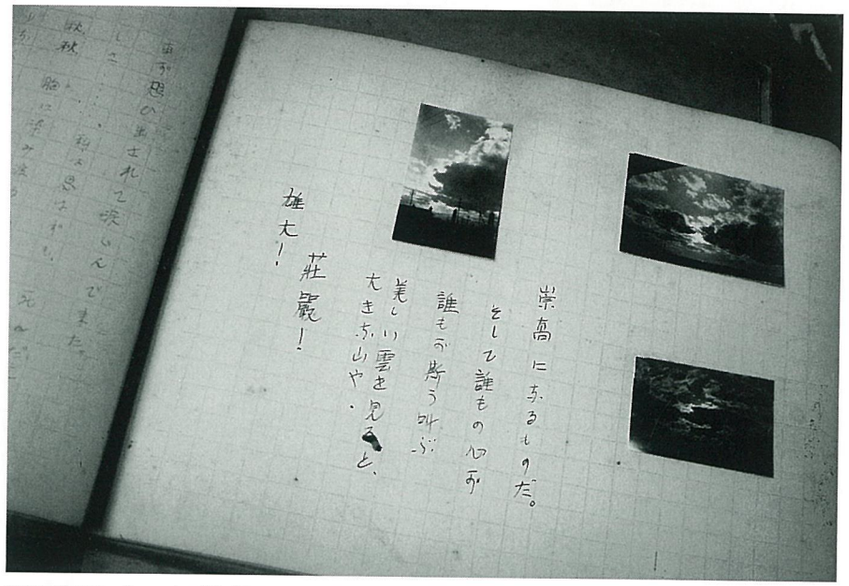
そして東京山岳写真会が創立したのは昭和14年のこと。その年の9月第2次世界大戦が始まる。日本軍、海南島上陸など政局は暗雲の中で戦時体制となった。もはや山の写真どころではなかったが、内田耕作は軍隊には行かず、徴用で製鉄会社に勤務するが、休暇をとっては北アルプスをよく歩いていた。少数の理事によってしばらく続けられていたCHCは、横文字の名ということで日本山岳写真研究会と改名した。

一方、写真会の実力者、斉藤金一郎と嶋村正雄は戦地へ向かったが、ついに帰らぬ人となった。斉藤は風見にとって無二の親友、嶋村は朗らかな良い男だったと言う。風見武秀も昭和18年1月上旬、海軍の写真班としてニューギニア島に向かった。

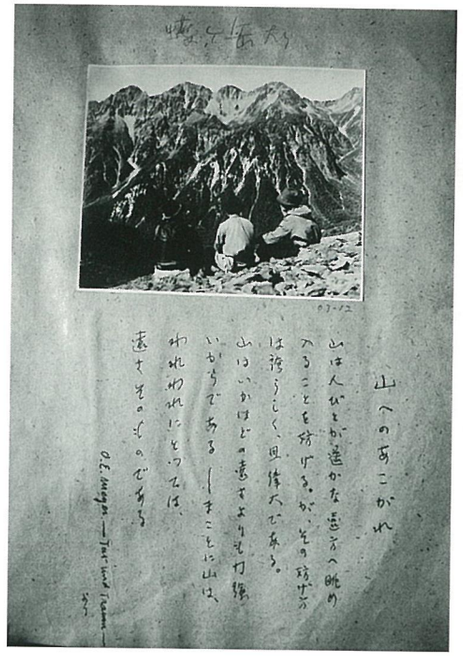
この頃、山岳写真は戦争の拡大とともに、撮影などほとんど出来なくなっていた。しかし、戦時下と言うのに、この年の7月に船越は個展を開いている。会場は東京・日本橋の高島屋だ。大四ツサイズ、47点を展示した。個展を最後に東京山岳写真会は、解散を余儀なくされた。



昭和18年1月上旬
海軍写真班としてニューギニア島に向かった風見武秀



昭和18年ころ　山へのあこがれを綴った内田耕作のアルバムから



昭和18年ころ　山へのあこがれを文章にして
アルバムに残した内田耕作

PEOPLE①　船越好文（1909～2001）

戦火に消えた写真集「雪線」

昭和11年の夏のこと、都内の運道具店に「山の写真の好きな人集まれ」と言うチラシが出回っていた。申し込み先は、神楽坂の岩科小一郎方。訪ねたのは英語教師の船越好文だ。「山の写真を撮る会」をつくると言う。そこで出会ったのが内田耕作。二人とも後の協会の創立会員である。集まってつくった会がカメラハイキングクラブ（CHC）である。

3年後、船越、内田とも先のクラブをやめ東京山岳写真会の創立メンバーとなる。船越は、早くから山やカメラ雑誌に作品を発表するなどベテランの山岳写真家であった。彼は昭和18年の夏、日本橋高島屋で個展を開いた。19年には初の山岳写真集『雪線』を目黒書店から出版する予定であったが、戦時下のこと、製本も終わって店頭に並ぶ寸前、空襲で灰燼となった。幸い一冊だけが戦火をまぬかれた。それは検閲のため監督機関に提出されていたものであった。

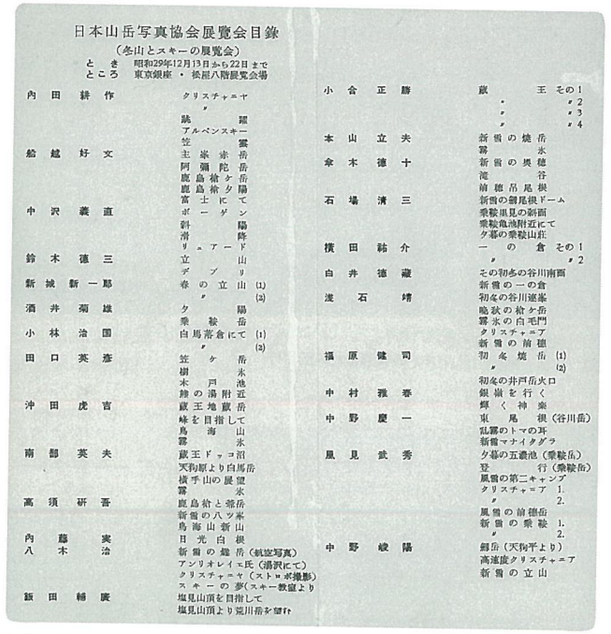
こうして奇跡の運命をたどった写真集は戦後、昭和33年、同じ著名で白水社から復刻し、さらに平成10年には船越満89歳の誕生日にちなんで東京新聞出版局から改定復刻版となって三度甦った。同年6月の中旬、同名の写真展が渋谷・代官山のギャラリーで開かれた。展示されたモノクロ72点、雪線を超え、山への情熱が凝縮されたようなプリントであった。

日本山岳写真協会名誉会員、日本山岳会名誉会員。平成13年10月9日逝去、享年92だった。

昭和33年（1958）6月中旬
渋谷代官山のギャラリーで
開催した写真展「雪線」会場
にて船越夫妻。向って左は
風見武秀

89歳の誕生日にちなんで、
発行された改定復刻版『雪線』

日本山岳写真協会と改称



日本山岳写真協会展覽会目錄

（冬山とスキーの展覽会）

とき　昭和29年12月13日から22日まで

ところ　東京銀座・松屋八階展覽会場

内田耕作	クリスチャニヤ	
	〃	
	駒ヶ根	
	アルペンスキー	
	笠雲	
船越好文	主峰	赤岳
	阿弥陀	岳
	鹿島槍ケ	岳
	鹿島槍夕	陽
	富士に	て
中沢義直	ボーダ	ン
	斜滑	降
	リュアー	降ド
鈴木徳三	立デブ	山リ
新城新一郎	春の立	山 (1)
	〃	(2)
酒井菊雄	ク	陽
	乗鞍	岳
小林治国	白馬落合	にて (1)
	〃	(2)
田口英彦	笠ケ	岳
	樹氷	
	木戸	池
	穂の湯附	近
沖田虎吉	蔵王地蔵	岳
	峰を目指	して
	鳥海	山
	霧氷	
南部英夫	蔵王ドッコ	沼
	天狗原より	白馬岳
	横手山の展	望
	霧氷	
高須研吾	鹿島槍と	爺岳
	新雪の八ツ	峯
	鳥海山新	山
内藤実	日光白	根
八木治	新雪の鐘	岳（航空写真）
	アンリオレイエ氏（湯沢にて）	
	クリスチャニヤ（ストックボ撮影）	
	スキーの夢（スキー教室より）	
飯田輔廣	塩見山頂を目指して	
	塩見山頂より荒川岳を望む	
小合正勝	蔵王	その1
	〃	〃2
	〃	〃3
	〃	〃4
本山立夫	新雪の焼	岳
	霧氷	
傘木徳十	新雪の奥	穂
	滝谷	
	前穂吊尾	根
石塲清三	新雪の鹿尾根ドーム	
	乗鞍黒見の新雪	
	乗鞍亀池附近にて	
	夕暮の乗鞍山荘	
横田靭介	一の倉	その1
	〃	〃2
白井徳蔵	その初冬の谷川南面	
	新雪の一の倉	
渡石靖	初冬の谷川連峯	
	鳴秋の槍ケ岳	
	霧氷の白毛門	
	クリスチャニア	
	新雪の前穂	
福原健司	初冬焼	岳 (1)
	〃	(2)
	初冬の井戸岳火口	
中村雅春	銀嶺を行	く
	輝く神	秘
中野慶一	東尾	根（谷川岳）
	弘霧のトマの耳	
	新雪マナイダグラ	
風見武秀	夕暮の五龍池（乗鞍岳）	
	登	行（乗鞍岳）
	風雪の第二キャンプ	
	クリスチャニア	1.
	〃	2.
	風雪の前穂岳	
	新雪の乗鞍	1.
	〃	2.
中野峻陽	鳥海岳（天狗平より）	
	高速度クリスチャニア	
	新雪の立	山

昭和29年（1954）12月
銀座松屋にて開催された日本山岳写真協会展「冬山とスキー」の目録

昭和20（1945）年8月15日、戦争は終わった。瓦礫に埋まった都会は、空襲の悲惨さを見せつけた。生活物資が不足している時代でも好きなことは、以外と早く立ち上るものだ。

昭和21年1月、『山と溪谷』誌が復刊する。同時に東京山岳写真会の再開を早くから気にしていたのは社長の川崎吉蔵と旧知の塚本閤治であった。再開の確認は、先ず写真展を開くことであった。準備のため川崎を始め、飯山達雄、永田一脩、小合正勝らが集まって相談をした。そこで会場は、小合のコネで新橋・田村町（現内幸町）にある桜田会館に決まった。この写真展は戦後の第1回展として秋に開催、貧しい世相に山の自然から心に潤うを与えた。

この写真展がきっかけとなって戦前の会員の消息もわかり、昭和21年6月には風見武秀が復員してきた。風見らが中心となってお互いに連絡を取りあい再開への準備を進めてきた。会員も全国に及んだので、名称の「東京」を「日本」として、日本山岳写真協会と改めた。

こうして一連の動きが固まってきたのは昭和22年の春のことであった。そして元皇族の李垠殿下を名誉会長とし、初代会長に塚本閤治、副会長に風見武秀、他役員に船越好文、内田耕作らの名が並び戦後再開の第一歩を踏み出した。

この写真は昭和31(1956)年頃、理事会の折に『岳人』から取材があって撮った群像写真である。左側は川口邦雄、当時24歳ぐらい。周りはエライ人ばかりだが、彼はなぜこの席にいるのか？　当時一匹狼であった川口は、相当な生意気青年だったという。「そんな奴は協会に入れてしまって理事をやらせろ」と強制的に入会させられたそうだ。古い理事の小合正勝は後に「あいつは、ガラスのような奴だからそっと扱え」と温かい待遇を受けたとか。
左より、川口邦雄、3人目沢井昌子、4人目高須研吾、5人目内田耕作、6人目風見武秀、7人目沖田虎吉、8人目塚本閣治、9人目小合正勝、10人目鈴木忠夫、11人目川崎吉蔵、12人目南部英夫、右端新城新一郎

先駆者たちが愛用したカメラ

山岳写真の始まりは、「確かにそこにいた」という所在証明のためだったそうだ。その芸術的価値を問題にするようになったのは時代が少し下ってからのこと。表現意図をもって山岳写真が撮り始められたのは、大判（4×5、5×7、以前は手札、キャビネなどと言った）、またはそれ以上のカメラによるものであった。当初の感光材料は、ガラス湿板か乾板だった。そのため重くかさばり、カメラも組立暗箱（現在のビューカメラの前身）であったため、大変な手数を要した。後にシートフィルム、ロールフィルムが開発され、カメラはより小型化し、現今の大中判カメラになった。乾板、シートフィルム用ではマキナ、イカベベ、小西六のリリーなどが愛用されていた。

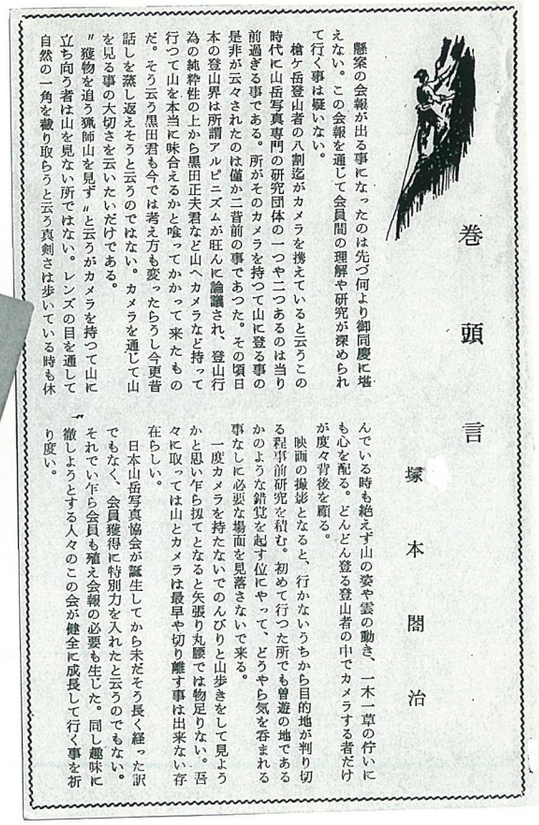
ロールフィルムの小型化によってさらに撮影は簡単になり、パーレットのようなフォールディングタイプ、さらに進化したスプリングカメラが愛用された。イコンタ、小西六のパール、マミヤシックス、それにマミヤプレスなどのカメラが爆発的に流行した。それと同時にローライフレックス型の二眼レフも愛用され、ついにマミヤ C330のようなレンズ交換式にまで発展した。

一方、大中判では一眼レフのソホフレックス型のもの、レフレックスコレレ、日本のリトレックス、ブロニカ、マミヤ RB などのほか、ハッセルブラッドもよく使われていた。

その後は、フィルムの性能が飛躍的に向上したので、35ミリカメラの距離計連動タイプのライカ型のもの、ニコン、キヤノン、ミノルタ、ペンタックスに代表される一眼レフも、山岳写真のポピュラー化に貢献した。その反面、山岳写真では今でも、より基本的な中判、大判での制作も絶えることなく続いており、先駆者の発見を基に新しい創造性を求め続けている。

会報と協会ニュースの発行

昭和31年(1956)5月　懸案の会報が発行された。



巻頭言

塚本閤治

懸案の会報が出る事になったのは先づ何より御同慶に堪えない。この会報を通じて会員間の理解や研究が深められて行く事は疑いない。

槍ヶ岳登山者の八割迄がカメラを携えていると云うこの時代に山岳写真専門の研究団体の一つや二つあるのは当り前過ぎる事である。所がそのカメラを持つて山に登る事の是非が云々されたのは僅か二昔前の事であつた。その頃日本の登山界は所謂アルピニズムが旺んに論議され、登山行為の純粋性の上から黒田正夫君など山へカメラなど持つて行つて山を本当に味合えるかと喰ってかかって来たものだ。そう云う黒田君も今では考え方も変ったらしく今更昔話しを蒸し返えそうと云うのではない。カメラを通じて山を見る事の大切さを云いたいだけである。

〃獲物を追う猟師山を見ず〃と云うがカメラを持つて山に立ち向う者は山を見ない所ではない。レンズの目を通して自然の一角を截り取らうと云う真剣さは歩いている時も休んでいる時も絶えず山の姿や雲の動き、一木一草の佇いにも心を配る。どんどん登る登山者の中でカメラする者だけが度々背後を顧る。

映画の撮影となると、行かないうちから目的地が判り切る程事前研究を積む。初めて行つた所でも曾遊の地であるかのような錯覚を起す位にやって、どうやら気を呑まれる事なしに必要な場面を見落さないで来る。

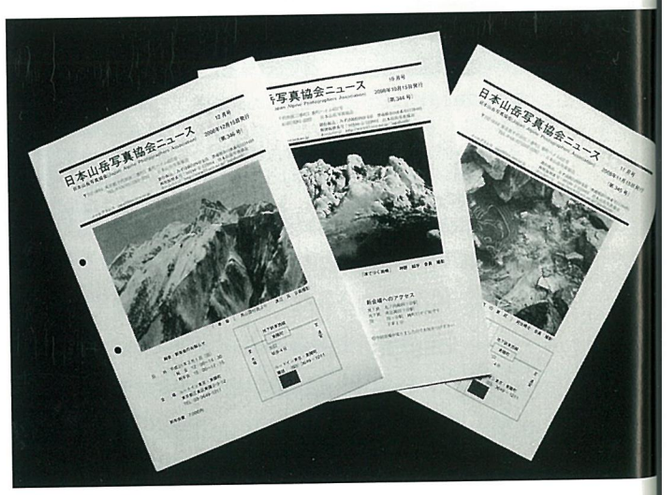
一度カメラを持たないでのんびりと山歩きをして見ようかと思い乍ら扨てとなると矢張り丸腰では物足りない。吾々に取っては山とカメラは最早や切り離す事は出来ない存在らしい。

日本山岳写真協会が誕生してから未だそう長く経った訳でもなく、会員獲得に特別力を入れたと云うのでもない。それでい乍ら会員も殖え会報の必要も生じた。同じ趣味に徹しようとする人々のこの会が健全に成長して行く事を祈り度い。

戦後、協会が発足していらい会報が発行されたのは昭和31（1956）年5月。創刊号（第1号）として、塚本閤治会長の巻頭言で始まる。「懸案の会報がでる事になったのは先ず、何より御同慶に堪えない。会報を通して会員間の理解や研究が深まれて行く事は疑いない」。A5判、約30頁程度もので内容も充実していた。残念にも第4号（昭和36年）をもって終刊となった。昭和52（1977）年の刷新以前まではB5版の8頁ほど印刷物「月報」だが、内容はきわめて事務連絡程度のものであった。

会報のネーミングを「日本山岳写真協会ニュース」と変えて発行したのは刷新以降のこと。その第1号は昭和53（1978）年、1月、2月合併号である。前年の52年11月に臨時総会が開催され、その報告が暮れの12月号に「協会ニュース」として掲載された。

以来、現在まで欠かさずに発行されている。



現在の会報（A4版）

公募作品の審査風景

協会のメインイベントである写真展は、会員の作品発表の場として誰でも応募することができるが、応募作品は無条件で展示するわけではない。

本展の写真展は、単写真として展示するもので、事前の作品審査が大きな課題である。会員の応募作品は平均500点、展示点数170点に絞られる。壁面が決められているので審査する方も慎重だ。作者の狙い、露出、ピント、構図など写真を作品としての視点からもシビアに検討される。写真展は作者の顔であるが、いっぽう協会の質が問われるのも写真展である。

風見会長を中心に、写真展出品作品の審査

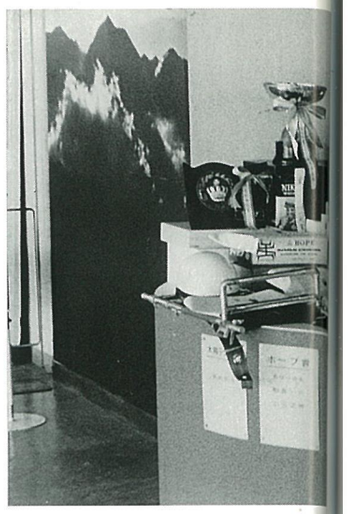
一般公募の作品審査風景

写真展会場の変遷

昭和43年（1968）「全日本山岳写真展」新宿・小田急デパートにて

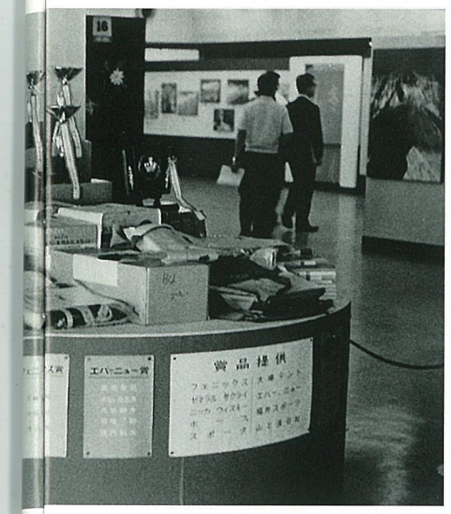
昭和34年（1959）「日本山岳写真展」小西六ギャラリー

昭和37年（1962）「日本山岳写真展―冬の山々」
小西六ギャラリー



昭和55年（1980）より　新宿野村ビル特設ギャラリー（約20年間）

写真展は会員の傑作作品の発表の場として戦前から開催されてきたが現在まで会場の推移を辿って見てみよう。戦前の会場のほとんどがデパートの特設会場である。戦後もしばらくデパートの売場を会場として使わしてもらったが、本格的な写真ギャラリーとして展示したのは昭和50年代になってからである。日本橋・室町にある小西六フォトギャラー、昭和55年まで続いたが小西六の会社移転により廃止。以後、新宿野村ビルの特設会場に移る。第1回目は昭和56年、テーマは「山・われらめぐる世界」展、平成14年まで同じテーマで20年間続く。以後は新宿・「コニカミノルタプラザ」や有楽町・東京交通会館地下のギャラリー、銀座の富士フォトサロンなどで開催したが、同会場は18年に閉鎖する。平成19年度から六本木・東京ミッドタウンに移り、これよりミッドタウンの会場で開催することになった。



昭和45年ころ、優秀な作品には賞品が授与された　小田急デパート会場にて

写真展小史（各年度の写真展については巻末の「日本山岳写真協会の歴史」参照）

年月日	内容	会場
昭和14年12月12日	東京山岳写真会創立	東京赤坂アメリカン・ベーカリー
昭和15年7月	山岳写真展開催	日本橋・高島屋
昭和21年秋	戦後第1回写真展開催	新橋・桜田会館
昭和22年春	「日本山岳写真協会」に改称	
昭和23年12月	改称後第1回写真展開催	銀座・松坂屋
昭和42年6月14日～18日	「全日本山岳写真展」開催（公募を始める）	新宿・京王デパート
昭和53年7月20日～25日	刷新後第1回写真展「自然と語ろう」開催	熊谷・八木橋デパート
昭和55年9月2日～13日	創立40周年記念写真展「自然のフォルム」開催	日本橋・小西六ギャラリー
昭和55年9月6日～20日	創立40周年記念写真展「四季の山々」開催	新宿・野村ビル
昭和56年9月15日～25日	写真展「山・われらをめぐる世界」開催	新宿・野村ビル
	（新宿・野村ビルでの写真展は、昭和56年から平成14年までの20回（20年）で終了。テーマ「○○○○―山・われらをめぐる世界」は、連続して現在も使用中）	
平成14年9月5日～18日	写真展「山・われらをめぐる世界」開催（公募を始める）	新宿・野村ビル　新宿・コニカプラザ
平成15年12月10日～19日	第1回選抜展「それぞれの山」開催（以後、毎年1回継続開催中）	コニカミノルタプラザ

平成17年（2005）
有楽町の東京交通会館「ゴールドサロン」と「富士フォトサロン」の2会場で開催。

平成19年（2007）新装なった六本木ミッドタウンの「富士フォトサロン」で開催

PEOPLE②　塚本閤治（1896～1965）

山岳映画のパイオニア

塚本閤治と言われても、今では「山岳映画」のことを想起する人は少ないのではあるまいか。戦前・戦後を通じて、山好きの若者たちにスクリーン登山を楽しませてくれた山岳映画のパイオニアである。一方、山岳写真も早くから始め、写真でまとめた北アルプスのガイド書を出版している。

昭和14年に創立した東京山岳写真会が日本山岳写真協会と改称されたのは、戦後間もない昭和22年の春、名誉会長として元皇族の李垠殿下、25年には正式な会長として塚本閤治がその任についた。その頃の協会の月例集会には、いつも塚本フィルムの作品が上映されて会員を楽ませてくれた。後に映像界に残した功績が評価され、昭和37年7月に紺綬褒章、11月には紫綬褒章を受章した。享年70。

昭和37年（1962）
紺綬褒章受章した塚本閤治さん（右側）

写真展の案内・広報活動

写真展の案内状
（写真上）・目録（左下）

写真展の開催が決まれば、作品応募から作品審査、そしてプリント仕上げまで一連の作業と同時に広報活動を行う。「DMはがき」に使用する写真の選定から、作品リストの作成まで毎年行っている作業でも神経を使う。写真展の成果は広報活動で決まるだけに「DMはがき」は写真展の「顔」でもあろう。

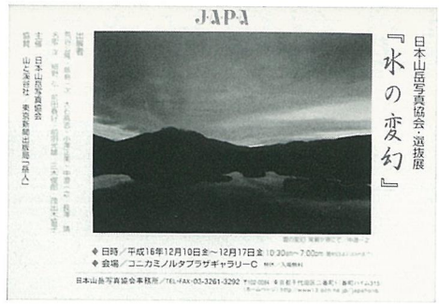
「作品リスト」は、観賞のための手引きであり、作者と作品とを結ぶ接点である。展示された写真がどのよう見方をしているか、また見られているか、その答えは会場で知ることが出来る。

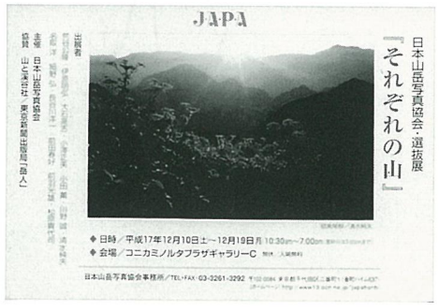
平成15年、選抜展始まる

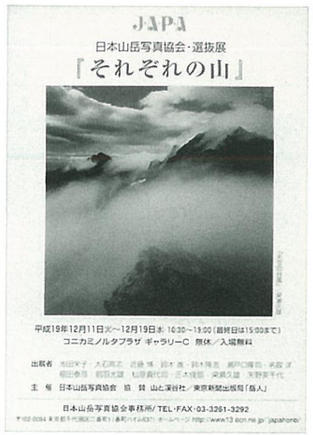
個性を主張する「選抜展」
新宿コニカミノルタギャラリー

選抜展が始まったのは平成15年。開催の趣旨は「やる気ある会員」のレベルアップを図るための作品発表の場として設けた写真展。毎回「それぞれの山」と言うテーマで統一し、サブタイトルを作者自身で決めるもの、個性を主張する作品づくりには格好な発表の場となっている。作品は2～3点でまとめた組写真か連作写真、全紙2点、全倍1点と言う構成。マットパネル仕上げの作品を展示する。応募者は、これまで12名～13名。

「会員のための写真展です。レベルアップのため継続して開催できれば」と語る選抜展実行委員。そして「単写真から一歩前進への気持ちで参加して欲しい」と言葉を重ねる。まさに継続は力なり。







選抜展の案内状のいろいろ

一般公募展始まる

平成18年（2006）の一般公募に入賞された皆様

入選作品には、会長より賞状が贈られる

素晴らしい山岳写真を撮っても発表する機会のない人も少なくない。そこで、協会では一般の山岳写真の愛好者からも作品を公募し、優れた作品は「日本山岳写真展」で展示し、いっぽう新人発掘の場としても期待が寄せられている。

平成14年度から一般公募制度を積極的に取り入れ、回を重ねる都度優れた作品を発見する。入選者には、特選1名（20万円）、準特選3名（5万円）、入選者若干名（賞状）に「賞」が与えられ、また協会の入会資格の特典もある。一般公募は、山岳写真への登竜門にもなっている。

公募展に入賞された皆様

公募展に入賞された皆様

PEOPLE③　三浦敬三（1905～2006）

世紀を超えて活躍

三浦敬三と言えばいえば、山の写真家としてよりスキー界の草分け的存在、しかも百歳超えて現役として活躍していた。協会では創立会員であり、また名誉会員である。そして私たちの先輩として会の発展のため力添えを頂いてきた。協会展には、開催の都度欠かずの新作を発表し、その写欲に感動させられる。100歳まで現役として山岳スキーを撮り続けてきた人は、まず世界でも稀有である。

協会が発足した翌年、昭和15年には早くも風見武秀（元会長）らと写真展を開催、いらい山岳スキーをテーマに数多く傑作を発表している。平成5年には米寿を記念して個展「吾が山々への讃歌」（コニカギャラリー）と写真集『遥かなる山を訪ねて』（千早書房刊）を出版するなど意欲満々たるものがあった。

平成15年2月、この年、白寿を迎えた三浦敬三は、ヨーロッパアルプスの最高峰モンブランの氷河・バレー・ブランシュに挑戦、しかもご子息の雄一郎ら親子3代の滑降は世界でも話題になった。77歳の喜寿にはキリマンジャロを滑降、88歳の米寿はアルプス氷河地帯の約100キロをスキーで踏破するなど、その活躍ぶりはまさに驚異に値するものだ。

生涯現役であった三浦敬三は、脳梗塞を患い平成18年1月、他界の人となった。享年101。だが三浦敬三の作品は協会にとっても永久不滅である。

三浦敬三写真展のお祝いに駆けつけた
猪谷千春さんとご子息の雄一郎さん

全国８支部の結成と写真展の開催

毎年開催される「東海支部展」　名古屋市 栄セントラルギャラリー
名古屋富士フォトサロンでも開催される

両毛支部写真展　前橋市と宇都宮市で交互に開催される

北陸支部展「山の断章」 支部設立10周年記念

関西支部展　毎年3月、京都市美術館にて本部及び各支部の写真も展示される

各支部の写真展の案内はがき

支部結成と初代支部長

結成年月日	支部名	初代支部長
昭和52年11月15日	松本支部	穂苅貞雄
昭和52年?月?日	東海支部	服部政信
昭和54年3月2日	上田支部	松井勝男
昭和57年8月11日	両毛支部	橋本勝
昭和57年12月?日	山梨支部	横森見伊
平成6年6月18日	北陸支部	小川春男
平成7年6月21日	南信支部	津野祐次
平成8年8月1日	関西支部	松村武生

協会の運営をめぐって惹起した問題が一件落着し、「刷新」と言う形で会がスタートしたのは昭和52年の暮れのこと。この年の11月臨時総会を開き、しばらく空席であった会長席に風見武秀を迎え、副会長に前田真三、高橋定昌、羽田栄治の三人が推される。そして理事長には川口邦雄がその任に就く。

このような人事体制と併せて、地方に支部を設けることを決める。先ず松本支部と東海支部が誕生する。54年には上田支部、57年は両毛支部と山梨支部、平成6年は北陸支部、続いて7年は南信支部、さらに8年には関西支部が設立される。そして8支部体制となり、現在に至っている。

こうして発足したそれぞれの支部は、本部との交流を深めながら独自の写真展や撮影会を催し、また写真集を上梓するなど、その活躍には目覚しいものがある。

昭和52年の刷新問題

新しい酒は、新しい革袋に

協会が創立して30年余、人で言えば、まさに働き盛りの年頃であろう。会員数が飛躍的に伸び、撮影会や研究会が盛んに行われてきた昭和40年代、その頃は会が活気に満ちていた時代であった。そして50年当初になると、会の運営をめぐってさまざまな問題がくすぶり始めた。さまざまな問題とは、不明瞭な会費の管理保管、不適切な理事会の運営、少数理事の独善的運営などなど、換言すれば運営上の瑕疵である。

そこで、問題解決のため昭和52年9月、協会の民主化、運営の近代化のために刷新委員会が誕生し、11月6日の臨時総会をもって会則の変更、役員人事の更新などが決議された。会員総数226名、決議は過半数を上回る132名の賛同、半年にわたる刷新問題もこれで解決。総会によりやっと新しい革袋が出来上がった。そして会員の皆さんによって刷新と言う新しい酒、旨い酒が注がれた。こうして協会の更なる発展の礎が固まってきたのである。

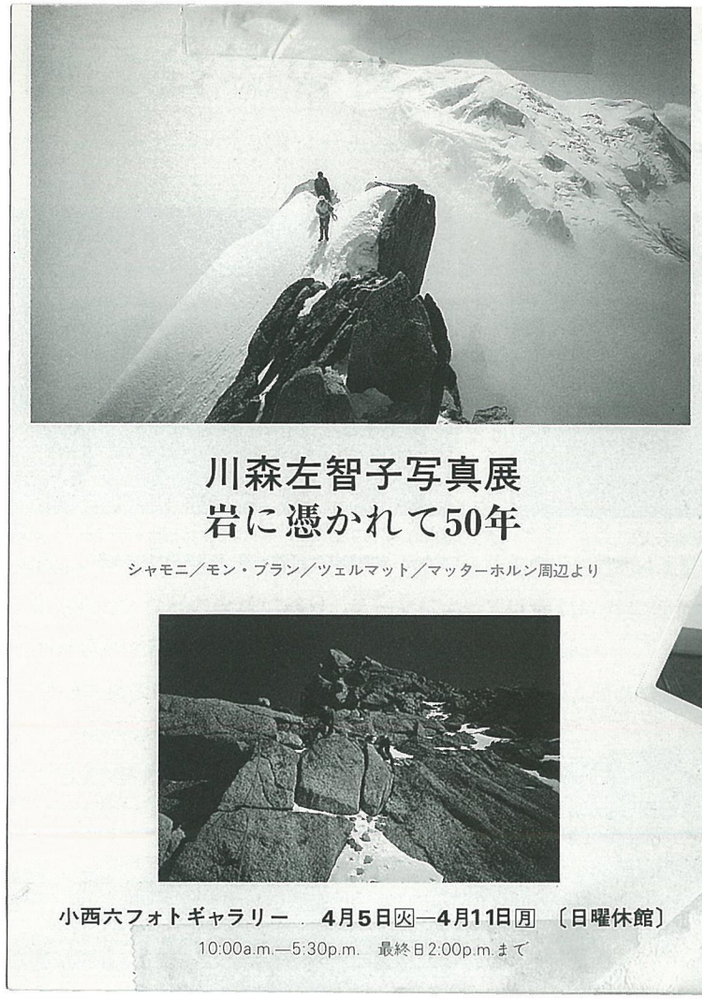
昭和52年（1977）刷新問題で挨拶する川口邦雄

会員の個展開催と写真集の刊行

平成15年（2003）4月、穂苅三寿雄さんの乾板写真展（JCII会場）で左から川崎吉光（元山と溪谷社長）、川口邦雄、穂苅貞雄らの顔が見える

平成12年（2000）10月、ヒマラヤに魅せられた野村董夫の個展　東京・丸善

平成11年（1999）川口邦雄個展「氷雪界」新宿コニカプラザ　風見武秀会長と



昭和58年（1983）日本橋の小西六フォトギャラリーにて
川森左智子初の個展

会員（作者）にとっては、写真集の出版や個展は大きな目標であり、また喜びでもある。写真は、撮る時は一瞬であっても、撮った写真を作品として発表することはシビアなものがある。それがいっぽう写真の持つ楽しみでもある。写真集は著者にとって人生の貴重な記録であり、また思い出のアルバムでもあろう。

中でも川森佐智子は、女流登山家として早くから知られ、昭和11年には前穂高4峰の初登攀の記録を残している有名人だ。戦後の昭和32年には単身フランスに渡り、9月にはモンブランの登頂を果している。昭和58年、日本橋の小西六フォトギャリー開かれた写真展「岩に憑かれて50年」は、彼女の山と写真のキャリアを物語るもので話題を集めた。本場のアルプスは、日本人にはまだ憧れの山であった。会場は、とくに山好きの女性たちで賑わった。まだ女性の山岳写真の個展が珍しい時代であった。

昭和60代から平成時代の半ば頃にかけて、会員の個展が都内のギャラリーだけでなく、地方でも盛んに開催された。また山岳写真集も、アマ、プロ問わずに数多く出版され、出版記念祝賀会も盛んに行われた。山の写真集が売れていた時代であった。

写真集の出版は、個々会員の実績であり、また会の誇りでもあった。

昭和60年（1985）4月、穂苅貞雄の出版を祝う会
新橋第一ホテル

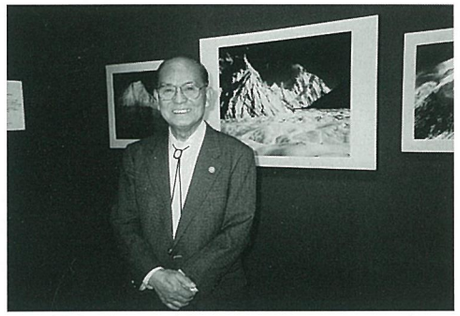
平成3年（1991）5月、燕山荘創立と赤沼淳夫写真集
出版記念祝賀会　ワシントンホテル

平成4年（1992）7月、津野祐二の出版を祝う会
駒ヶ根文化センター

平成15年（2003）6月、松井勝夫の出版を祝う会
軽井沢プリンスホテル

PEOPLE④　風見武秀（1914～2003）

山岳写真のパイオニア



平成14年（2002）風見武秀写真展「世界の山」
富士フォトサロン

昭和33年（1958）ネパールヒマラヤ（ジュガールヒマール）にて
左から　古原和美、山川雄一郎、深田久弥、風見武秀

『岳人』
（昭和61年6月号）
掲載誌と著書（左）

ここで、風見武秀を語るのにはあまりにもスケールが大きすぎる。なぜならば、協会の歴史（元協会会長）そのものであるからだ。

風見武秀が山の写真を撮り始めてから早くも70年。その間、写真展80数回、出版は約20冊に及ぶと言う。協会の創立者として大先輩であり、昭和52年の協会刷新いらい会長としての大役を26年もつとめて頂いた。撮りたいものは撮ると言う信念で、戦後は、作家の深田久弥らとネパール・ヒマラヤへ、いらい海外の山に目をむけ世界の名峰を撮り続けた。それらは写真集『風見武秀世界の山』を始め『世界の秀峰』、『世界の山稜』などでも知ることができる。著書の中でも『カメラ片手に地球を駆ける』は世界の人と山との出会いを軽妙の文章でまとめたもので、風見武秀の世界の旅を知る格好の本だ。

昭和62年の秋、写真の功績が高く評価され勲四等瑞宝章を受賞し、平成7年には日本山岳会名誉会員に推挙された。平成14年、88歳の米寿を祝い、生涯現役の活躍を願っていたが惜しくも平成15年12月20日逝去された。享年89であった。

例会会場の変遷

例会は、いうまでもなく会の行事の一つ、会員相互の親睦を図る他、業界のフレッシュな情報を知るためにも欠かせない。

昭和20年代の例会は、主に銀座「三笠会館」、作品評や山岳映画、またスライドを上映するのが慣わしであった。30年代に入ると銀座「直吉」に会場が移る。写真展の企画や、写真集の出版の話題で充実した例会であった。しばらくの直吉会場が続く。昭和52年の刷新以後は、千駄ヶ谷「さより」、62年より六本木にも近い由緒ある「国際文化会館」。平成に入るとJR四谷駅前の「スクワール麹町」や麹町4丁目の「食糧会館」などの会場に移り、テーマによっては会員以外の部外者にも声をかけ公益団体としても大きな役割を果たしている。

急速な技術の進歩は、スタイルも時代によって変わり、場合によっては写真関係の業者を招聘し、新情報を提供して頂くなど、充実した例会になるよう努力している。

昭和30年代当初の例会、銀座「直吉」にて

昭和52年暮れ。刷新後、初の例会。千駄ヶ谷「さより」例会後の忘年会
右より2人目前田真三の顔も見える。

例会に業者を迎えて新製品の紹介　四谷スクワール麹町にて

国際山岳年写真展の開催

平成14年（2002）1月国際山岳年写真展「世界の山嶺に息づく」（協会員24名による）。UNU·UNギャラリーにて

世界の山岳地域における環境問題は、21世紀の大きな課題。国連は2002（平成14）年を国際山岳年と決議し、山岳自然と人との関わり合いを再認識し、地球の未来を考える年とした。これに関連して世界各地でさまざまな運動が繰り広げられた。日本山岳写真協会は国際山岳年にちなみ、東京・渋谷の国連大学主催の行事に協力、1月25日から3月29日までUNU·UNギャラリーで「世界の山嶺に息づく」と言うテーマで写真展を開催。展示作品は、全倍サイズ、国内外の秀峰24点が会場の壁面を飾り来場者を魅了させた。これらの山岳写真から、山の素晴らしさと併せて山の自然が持つ尊厳をアッピールした。

1階のエントランスホールでは特別展示として皇太子殿下の「奥秩父」と橋本竜太郎元総理大臣（故人）の「ヒマラヤ」の作品、それぞれ2点を展示。また写真家・白川義員氏の秀作、世界百名山の内、4点が展示され注目を集めた。

国際山岳年写真展のテープカット

お祝いの挨拶をする風見会長

4点の写真を出展、挨拶をする写真家・白川義員氏

写真展のパンフレット

船で旅立ったヒマラヤ

昭和31年5月、日本人初の8000mの高峰・マナスル登頂の壮挙は、日本の海外登山に大きな希望をもたらした。協会員で早くからヒマラヤ入りをしたのは風見武秀（元会長）。続いて羽田栄治（現会長）の2人だ。いずれも海外旅行の自由化前、1ドルが360円時代の海外登山である。

風見武秀は昭和33年、作家の深田久弥らと4人で「ジュガール・ヒマール探査隊」を組織して氷河の山旅に向かった。ヒマラヤへ旅立つ深田隊は、神戸から英印汽船の「サンゴラ号」で出航、1万トンにも満たない小さな貨客船であった。ネパールの首都カトマンズまで、神戸を出てから何と45日間を要した。「ヒマラヤのプレリュードとしては長すぎたようだ」と深田久弥は語っていた。

2年後の昭和35年、羽田栄治は、新聞社の報道特派員として全日本ヒマラヤ遠征隊に参加する。深田隊と同じ山域のビッグホワイトピークへの挑戦である。ネパールへはやはり深田隊と同様に神戸から乗船する。英国POライン所属の3万トン近い豪華船「イベリア号」。まず、神戸からシンガポールまで船で、後はBOACのフライトでインドのカルカッタへ向かった。そして同地からは列車で北インドのパトナへ。再び空路を利用して、やっとカトマンズの土を踏む。日本からネパール入りまで26日間、深田隊よりはだいぶ早かったが、いずれにせよ今日とは隔世の感の思いであろう。カトマンズからのキャラバンは14日間。そして氷河の中で暮らすこと約2ヶ月、登って、撮って、書いての毎日であったという。

あれから50年、一昨年傘寿を迎えた羽田栄治は、個展「ヒマラヤ今昔」を開催した。それはヒマラヤへの想い出が凝縮された写真展でもあった。

昭和35年（1960）氷河上で撮影する羽田栄治

協会展と皇太子殿下

平成11年（1999）「'99-山・われらをめぐる世界」に
ご来場いただいた皇太子殿下・同妃殿下

殿下の作品「紅葉の那須」

殿下の作品「雲上のヒマラヤ」

協会にとって光栄なことは、皇太子殿下が山で撮られた写真を協会展にご出品して頂いていることだろう。今年、平成21年は、協会創立70周年の際し、今回もご出展頂き周期年の節目に華を添えて頂いた。

さて、殿下の作品のご出展は今回で4作目になり、しかも写真展には2度のご来場を頂いた。第1回目は、殿下が皇太子承継以前の浩宮徳仁親王殿下の頃、昭和61年9月に新宿野村ビルで開催された協会展「われらをめぐる世界」展である。2回目は平成11年9月、協会創立60周年にちなんで新宿野村ビルでの協会展であった。すでに皇太子殿下となられ、妃殿下雅子さまとご一緒のご観賞であった。

理事会と合同理事会

8支部を加えた合同理事会

定例理事会風景

会の運営を代表して執行する理事会は、月一回の定例理事会を開催し年間事業の企画立案をする会の要である。理事は立候補、または会員からの推薦によるもので、任期は原則として２年、ただし再任は妨げない。

理事会で決議された事項は、「協会ニュース」に掲載し会員に報告される。合同理事会は、地方８支部との交流、情報交換をするもので年に２～３回開催している重要な会議である。問題があれば解決に向かって討議が交わされる。地方支部とのコミュニケーションを図るためにも欠かせない会議である。

大好評を博した全国各地の撮影会

平成14年（2002）盛況の
「千畳敷カール撮影会」

昭和53年　瑞槽山撮影会の帰路

立山天狗平での撮影会

平成15年（2003）高山植物の咲き乱れる「伊吹山撮影会」

撮影会は、会の楽しい行事の一つ、写真を撮ることは当然だが、いっぽう会員相互の親睦も欠かせない。恒例の行事として新緑や紅葉ないし新雪の季節、それぞれの支部の協力を得て開催するもので、参加者は家族、友人も大歓迎。しかも日頃の懇親を深め、また撮影地では、先輩会員から撮影技術も学べるのも魅力である。

撮影会は、これまで支部の持ち回りで行われ、それぞれ地域の山に精通して会員が撮影ポイントを案内してくれる。これまでの撮影会は、例えば「新雪の立山」（北陸支部）、「初冬の奥日光」（両毛支部）、「樹氷の千畳敷カール」（南信支部）、「高山植物咲き乱れる伊吹山」（関西支部）、「新緑の高峰高原」（上田支部）、「紅葉の富士北麓」（山梨支部）、「夏の燕岳」（松本支部）などで開催され、いずれも大好評である。

協会のバッヂとロゴマーク

バッヂ

J·A·P·A

ロゴマーク

会のバッヂが制定されたのは、たしか昭和30年代初めだったと思う。昭和31年5月発刊の会報第1号（創刊号）の裏表紙に、円形のＪＡＰＡマークが使用されている。デザインしたのは全国商業美術家協会長の岡秀行。『日本の伝統パッケージ』の著作でも知られる岡秀行は、若い時から山好きで、著名な岳人とも交流があった。また前副会長の前田真三の作品を高く評価した人でもある。一方、ＪＡＰＡの書体をデザインしたのは、同じく前副会長の高橋定昌。都岳連会長や日山協副会長の要職を歴任された方である。多摩美術学校を卒業、商業美術界で活躍していた。書体は、昭和52年秋にデザイン化したものである。高橋定昌は昭和57年勲４等瑞宝章を受賞、昭和63年10月に逝去された。

盛大に挙行された
周年祝賀会

昭和55年（1980）9月、創立40周年記念祝賀会　野村クラブ

昭和63年（1988）9月、創立50周年記念祝賀会　京王プラザ

平成11年（1999）9月、創立60周年記念祝賀会　京王プラザ

創立70周年を迎えた協会だが、それは決して平坦な道のりでなく、むしろ紆余曲折を経ての70年であった。現在山岳写真のグループが数多く誕生しているが、それも70年もの間、戦時体験を経て連綿として続けてきた団体は、まず稀有であろう。

昭和42年には記念写真展を新宿・京王デパートで開催する。昭和52年組織を改革し、写真展、会員の個展、また出版も盛んになり、地方には支部も設立される。昭和55年には創立40年。「自然のフォルム」「四季の山」のテーマで2ヶ所の会場で記念写真展を開催する。協会展の他にグループ展、個展、写真集の出版など、会員の実力を示す活動が多岐にわたって行われた。

昭和63年、創立50周年を迎えた。記念出版『山岳写真のすべて』を出版する。創立60周年は平成11年。9月恒例の新宿野村ビルでの協会写真展には皇太子殿下、同妃殿下のご高覧を頂く。そして平成21年は創立70年。時代の節目を契機として、初心にかえり、時代に対応しながら実力ある会として今後の発展を期待したい。

1年の締めくくり―総会

年次総会風景、
ルートイン東京・東陽町

総会終了後の懇親会・「星影のワルツ」で締めくくる

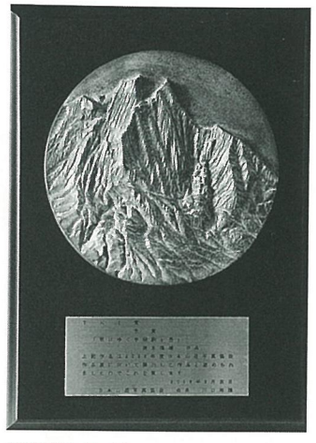
年度総会は一年の締めくくり、会の大きな事業である。

毎年その年の2月上旬に開催される総会は、会の最高決議機関として地方支部の会員も出席し議事に従って進行、まず事業報告、収支決算などまた事業計画を立案し、次年度にむけてさまざまな問題を討議する。

総会を契機としてあらたなスタートにたち、明日に向かってさらなる発展を期待する。しかし、ひとたび堅苦しい総会が終われば、支部との交流を深める楽しい懇親会に早変わり。恒例のカラオで「星影のワルツ」を歌う楽しいひと時、今年もおおいに頑張ろうというところだ。

TKI賞の創設

この賞は、本協会の創立会員であり大先輩の塚本閤治、川崎吉蔵、飯島道人の３氏（いずれも故人）が1950年頃、会員の山岳写真をより発展させるために奨励制度を設け、賞の名称を先の３氏のイニシアルからTKI賞とした。当初は基金を奨励金としたが飯島氏の発案でトロフィーに代え、これをその年の協会展で注目すべき作品に授与しようということで実現の運びとなった。審査は協会展に出品された作品から決める。発表は展示作業終了後に写真展委員によって決定する。優れた作品の評価は順位をつけずに同格として、「宙」「光」「心」という名称で賞を与えるもので、その資金は故・飯島氏が生前に代表して提供された。なおトロフィーのレリーフは、ヒマラヤのタムセルク峰。川口邦雄の原画による。



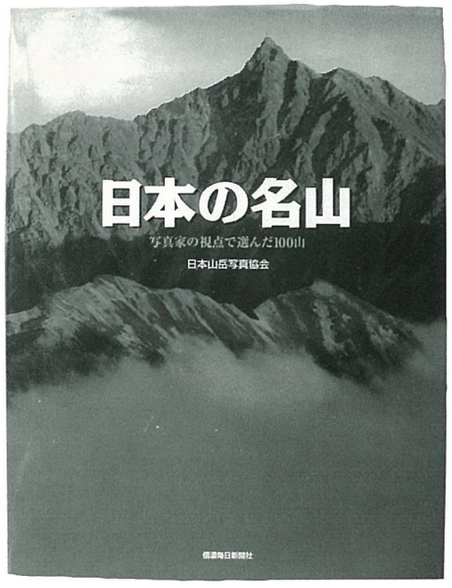
TKI賞のレリーフ

協会発行の出版物

協会で発行した山岳写真技術書　日本カメラ社

創立70周年を記念して
発刊した、会員による
傑作写真集

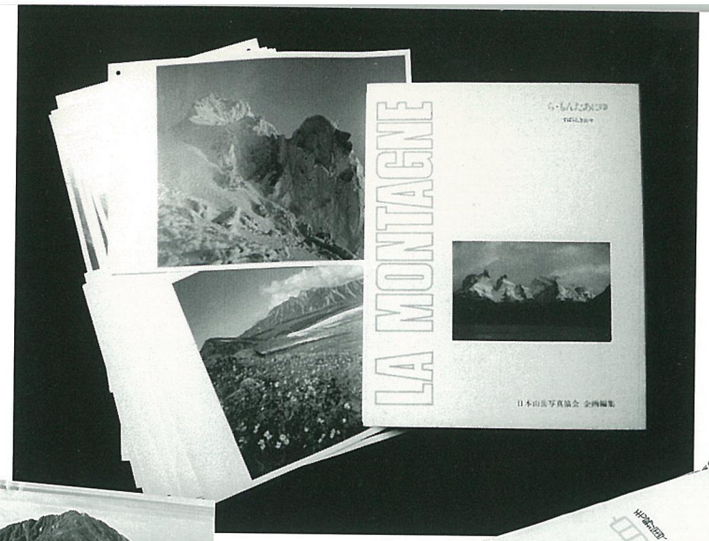
協会員の撮影した
写真によるビジュアル・ガイド書



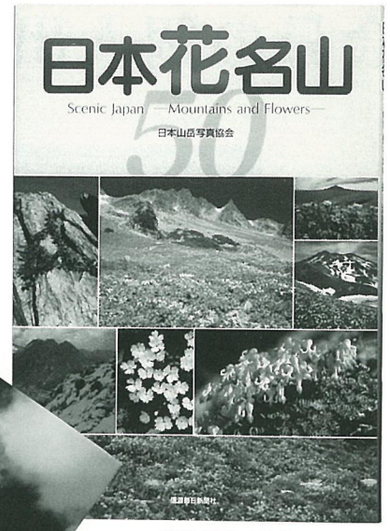
山岳写真家（協会員）の視点で選んだ100山

会員の作品集『山稜』が発行されたのは、昭和33年を皮切りに35年まで3冊が山と溪谷社から発行された。会が最も充実した頃であった。時代を超えて昭和52年には『ら・もんたあにゅ』が発刊する。額装用の写真集である。昭和63年、創立50周年記念出版『山岳写真の完成』。平成11年には『日本の名山』と『山岳写真の魅了』を発行、創立65周年記念に『山岳写真の上達技法』を発刊。以後、平成16年から20年までの5年間、年に1冊、松本支部でまとめたビジュアルガイド『見る・撮る・描く ── 絶景の山』シリーズ（信濃毎日新聞刊）を発行。会員の作品による楽しいガイドブックとなった。またカレンダーも松本支部でまとめられ、好調。

平成21年いよいよ創立70周年を迎えた。記念として、『日本の花名山』、『美山彩嶺』、『山岳写真の探究』、『目で見る日本山岳写真協会70年』の4冊を同時出版した。



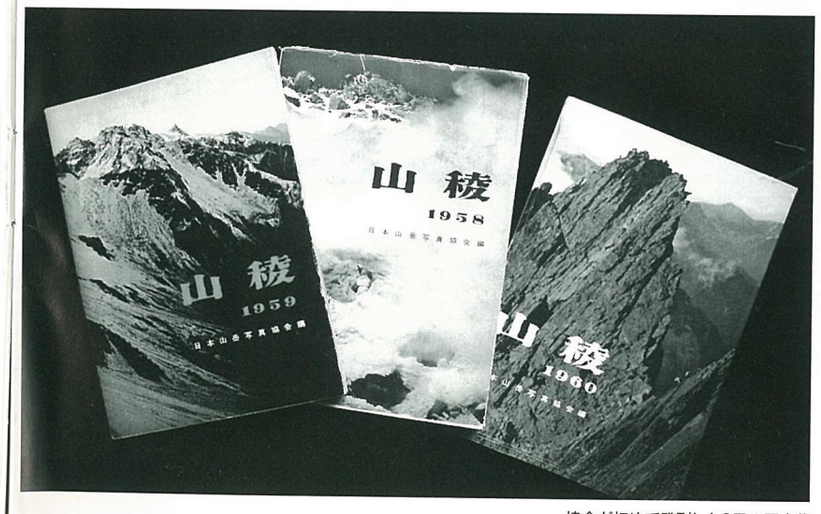
昭和57年（1982）
一枚ごとに額装が可能な写真集
『ラ・モンターニュ』発刊



創立70周年を記念して発刊した
『日本花名山』

協会員の写真による カレンダー

地方支部で発刊した、
記念の写真集



協会が初めて発刊した3冊の写真集

歴代会長・副会長

■東京山岳写真会（昭和14年12月12日創立）	
昭和14年～昭和20年	代　　表　今井雄二
■日本山岳写真協会（昭和22年改称）	
昭和22年～昭和25年	名誉会長　李垠（元皇族）
	会　　長　塚本閤治
昭和25年～昭和40年	会　　長　塚本閤治
	副 会 長　風見武秀・小合正勝
昭和40年～昭和52年	理 事 長　風見武秀（塚本逝去により、会長不在のまま）
昭和52年～平成15年	会　　長　風見武秀
	副 会 長　高橋定昌・羽田栄治・前田真三 （高橋・前田逝去により、後半は羽田のみ）
平成16年～平成20年	会　　長　川口邦雄（風見逝去により）
	副 会 長　羽田栄治
平成21年～	会　　長　羽田栄治
	副 会 長　青野恭典・市場紳太郎・橋本勝

会員の個人出版物

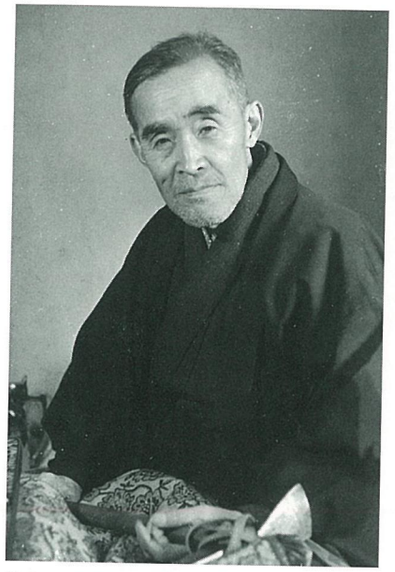
平成20年（2008）5月　盛大に行われた出版と写真展記念パーティーで、挨拶する（社）日本写真家協会会長田沼武能氏（中央）、新宿三井ビル

会員でプロ・アマに問わず個人の出版物は、会の活動につながる。創立会員の元会長・風見武秀の初出版は昭和23年刊の「風見武秀山岳写真集」。いらい約20冊と言う。プロ作家の川口邦雄は写真集や著書も多数、同じく青野恭典の出版物も北アルプスや東北の山など多数あり、また中アは津野祐次、南アでは上野巌、また尾瀬や技術書では川井靖元、鈴木克洋は日光の写真集を出版する。いっぽう槍ヶ岳・穂高などの写真集は穂苅貞雄、赤沼淳夫は燕岳の写真集を出版している。最近では、野村董夫がパキスタンの山を紹介している。代表的な作者を列記してみたが、ここでは紹介出来ないほど会員の出版物が多い。ほか自費出版も少なくない。

協会員個人で出版した数々の写真集

おちこちの人

一枚の写真から甦った人たち思い出のアルバム



槍岳山荘の初代オーナーで、
戦前より活躍していた穂苅三寿雄

昭和60年ころ、槍岳山荘まえにて。
左より小池潜（双六小屋）穂苅貞雄（槍岳山荘）、塚本福治郎（会友）、羽田栄治の各氏

昭和50年代、ある会合。当時の山と溪谷社社長・川崎吉蔵

昭和40年ころ、ある日の今井雄二夫妻。東北の山にて

山岳界の全国組織の結成に尽力した協会元副会長の高橋定昌
協会のロゴマークを創作した。

昭和30年代、日本山岳写真協会初代会長の塚本閤治。あるパーティにて

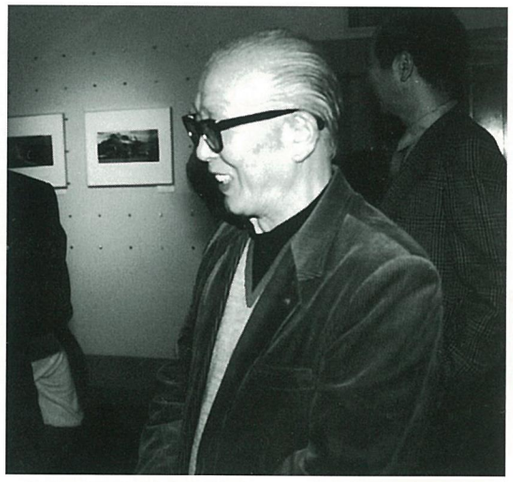
ある忘年会で。カラオケを楽しむ高須研吾（左）と内田耕作（右）

写真右より若林正人、金海次郎、羽田栄治、池田甚兵衛（昭和55年ころ）

立山・剣岳をホームグランドにして活躍、
昭和59年（1984）名古屋で個展を開催した創立会員の中野峻陽夫妻

新年会で挨拶をする高木富次郎名誉会員（創立会員）

平成1年（1989）コニカフォトギャラリーで
個展「信濃路の四季」を開催した柴崎高陽名誉会員（左端）と風見武秀会長（右端）



ある日の安彦六郎。昭和40年代に活躍された。

日本山岳写真協会（JAPA）の歴史

年度（西暦）	月日	
昭和11年（1936）	10月	カメラ ハイキング クラブ（CHC）創立
		会長＝坂部護郎　創立会員＝岩科小一郎・内田耕作・嶋村正雄・船越好文
昭和12年（1937）	12月	CHC大会　参加者＝坂部夫妻ほか23名
昭和13年（1938）	4月14日～	CHC第1回写真展開催　銀座・伊東屋にて 出展者＝坂部・川崎・塚本・今井・風見・嶋村・斉藤・岩科
昭和14年（1939）	7月	CHCが、運営上の問題で解散
	12月12日	CHC主力メンバーによって東京山岳写真会を創立　東京赤坂アメリカン・ベーカリーにて 創立メンバー＝岩科・船越ほか、新規会員　袋一平ほか
昭和15年（1940）	7月	「山岳写真展」開催　日本橋・高島屋　出展 22名　65点（高木富次郎・永田一脩ほか）
昭和16年（1941）	7月	「山岳写真展」開催　日本橋・高島屋　出展 25名　73点（岡田紅陽ほか）
		日本山岳会編『高山深谷』（第10輯） 船越・内田・塚本（閣）・今井・風見・笹森・三浦・佐藤・柴崎・中野・月原ほかの作品掲載
昭和18年（1943）	1月	風見武秀、海軍報道班員としてニューギニアへ
昭和19年（1944）		船越好文、山岳写真集『雪線』を出版の予定であったが、店頭に並ぶ前に空襲に遭う （昭和33年復刻版、平成10年改訂版を出版）
昭和20年（1945）	8月15日	終戦
昭和21年（1946）	6月	風見武秀、ニューギニアより帰国
	秋	戦後第1回写真展開催　新橋・桜田会館
昭和22年（1947）	春	「日本山岳写真協会」に改称　名誉会長＝元皇族の李垠　会長＝塚本閣治
昭和23年（1948）	12月	「山岳写真展」開催　銀座・松坂屋
昭和24年（1949）	春	「山岳写真展」開催　日本橋・丸善
	6月	「山岳写真展」開催　日本橋・三越
昭和25年（1950）	4月	「山岳写真展」開催　日本橋・三越
昭和28年（1953）	10月28日	第1回「山岳映画傑作の夕」　共立講堂
	12月15～19日	「山岳写真展」開催　日本橋・三越
昭和29年（1954）	7月2～7日	「山岳写真展」開催　銀座・松屋（小西六ギャラリー）
	12月2日	第2回「山岳映画傑作の夕」　共立講堂
	12月13～22日	「山岳写真展」開催　銀座・松屋（小西六ギャラリー）
昭和30年（1955）	1月10日	委員会開催　富士ビル
	5月	マナスル登頂成功
	6月2日	第3回「山岳映画傑作の夕」　共立講堂
	7月1～6日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
昭和31年（1956）	5月	会報第1号発行　巻頭言＝塚本閣治　編集＝南部英夫
	6月5～10日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
	11月8日	会報第2号発行
	11月29日	第4回「山岳映画傑作の夕」　共立講堂
	12月11～16日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
昭和32年（1957）	6月21日～20日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
	11月22～27日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
昭和33年（1958）	6月27日～7月2日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
		風見武秀、隊員としてジュガールヒマラヤへ
昭和34年（1959）	1月23～28日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
	6月26日～7月1日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
昭和35年（1960）	5月20日	会報第3号発行
	7月1～6日	「山岳写真展」開催　小西六ギャラリー
	11月29日	35年度映画会開催　九段会館
		羽田栄治、ヒマラヤ遠征隊の報道特派員として参加

年度（西暦）	月日	
昭和35年（1960）		昭和33～35年まで、年に1冊ずつ写真集『山稜』（山と溪谷社）を出版する
昭和36年（1961）	4月15日	会報第4号発行
昭和37年（1962）	1月	山岳写真展「冬の山々」開催　新宿・伊勢丹
昭和40年（1965）	9月	塚本閤治会長逝去、享年70。以降、会長不在のまま風見武秀が理事長として会務に当たる
昭和42年（1967）	6月14～18日	「全日本山岳写真展」　新宿・京王デパート　公募を始める
昭和43年（1968）	6月	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和44年（1969）	7月11～16日	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和45年（1970）	7月	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和46年（1971）	7月16～24日	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和48年（1973）	7月12～17日	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和49年（1974）	10月18～23日	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和50年（1975）	7月11～16日	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
昭和52年（1977）	7月1～6日	「全日本山岳写真展」　新宿・小田急本館
	6月7日	日本山岳写真協会刷新発起人会開催
	11月6日	日本山岳写真協会刷新第1回総会開催　東京都勤労福祉会館 会長＝風見武秀　副会長＝前田真三・高橋定昌・羽田栄治 事務所＝新宿区三栄町10　日鉄四谷コーポ306サンエイフォト内
	11月15日	松本支部結成　支部長＝穂苅貞雄
		東海支部結成　支部長＝服部政信
昭和53年（1978）	7月20～25日	日本山岳写真協会展開催　熊谷・八木橋デパート
	10月14～15日	協会撮影会開催　金山山荘
昭和54年（1979）	1月21日	総会開催　東京都勤労福祉会館
	3月2日	上田支部結成　支部長＝松井勝男
	4月17～28日	日本山岳写真協会展「自然のフォルム」―世界の山から―開催　小西六ギャラリー 巡回展＝松本支部、上田支部、野村ビル（7月）、浅草公会堂（8月）
	6月2～3日	谷川岳親睦撮影会開催
昭和55年（1980）	9月2～13日	創立40周年記念 日本山岳写真協会展「自然のフォルム」開催　小西六ギャラリー
	9月6～20日	〃　〃　「四季の山々」開催　野村ビル
	10月25～26日	協会・山梨支部撮影会開催　「八ヶ岳山麓」
昭和56年（1981）	2月1日	総会開催　東京都勤労福祉会館
	9月15～25日	「山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳写真公開ゼミナール
昭和57年（1982）	1月31日	総会開催　東興ホテル
	3月	写真集『ら・もんたあにゅ』（出版科学総合研究所）出版
	4月13～21日	風見武秀写真展「世界の秀峰」開催　小西六フォトギャラリー 巡回展＝名古屋城西ノ丸展示場（5月）、大阪（6月）、野村ビル（6月）
	8月11日	両毛支部結成　支部長＝橋本勝
	9月10～19日	「'82-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳写真教室「やさしい山岳・自然写真」
	11月3日	副会長高橋定昌氏　勲四等瑞宝章受賞
	12月	山梨支部結成　支部長＝横森見伊
昭和58年（1983）	1月30日	総会開催　東興ホテル
	3月28日	事務所移転。サンエイフォト移転に伴い、麹町6-2 ニュー弥彦ビルへ
	9月10～18日	「'83-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　9月18日，納会
	10月8～9日	協会撮影会開催　「那須」
昭和59年（1984）	1月29日	総会・新年会　トーコーホテル
	3月15日	名誉会員今井雄二氏逝去、享年86
	8月22日	副理事長金海次郎氏、事故死、享年43
	9月12～17日	「'84-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳映画会、山岳・自然写真講座

年度（西暦）	月日	
昭和59年（1984）	10月20～21日	山梨支部撮影会開催　「信州峠」
昭和60年（1985）	2月3日	総会・新年会開催　　トーコーホテル
	6月29～30日	両毛支部撮影会開催　「谷川岳」
	9月14～19日	「'85-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳映画会、山岳・自然写真講座
昭和61年（1986）	2月2日	総会・新年会開催　トーコーホテル
	2月21日	会友高橋照氏逝去、享年71
	5月24日	風見武秀会長叙勲（勲四等瑞宝章）祝賀会開催　ホテルニューオータニ
	9月11～16日	「'86-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳・自然写真講座　9月13日、浩宮殿下来場
昭和62年（1987）	2月1日	総会・新年会開催　トーコーホテル
	5月16～17日	「新緑の瑞牆山麓撮影会」開催
	9月10～15日	「'87-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳・自然写真講座
	10月17～18日	「秋の奥日光撮影会」開催
	12月31日	名誉会員笹森秀雄氏逝去、享年84
昭和63年（1988）	2月7日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	6月	創立50周年記念出版『山岳写真のすべて』刊行
	9月15～20日	「'88-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山岳写真の名作と世界の山の話
	9月16日	日本山岳写真協会創立50周年祝賀会・「山岳写真のすべて」出版記念会開催　京王プラザホテル
	9月25日～10月2日	「秋の双六岳撮影会」開催
	10月10日	副会長高橋定昌氏逝去、享年77
平成1年（1989）	2月5日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	5月2日	会友池田甚兵衛氏逝去、享年66
	5月26～30日	「燕岳・燕山荘周辺撮影会」開催　本部・支部共催
	7月27日～8月2日	柴崎高陽写真展「信濃路の四季」開催　コニカフォトギャラリー　大阪（8月）、名古屋（9月）
	9月14～19日	「'89-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山の映画・お話「世界の山と日本の山」
	9月29～10月1日	南信支部撮影会開催　「中央アルプス・千畳敷」
平成2年（1990）	2月4日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	2月14～20日	風見武秀写真展「世界の山稜」巡回展開催　富山（2月）、大町（4月）、飯田（6月）、名古屋（7月）、鶴岡（7月）、上田（8月）、青森（9月）
	5月26～27日	「乗鞍高原撮影会」開催　本部・支部共催　参加48名
	6月27日	名誉会員柴崎高陽氏逝去、享年87
	9月13～18日	「'90-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山の映画とスライド
	11月17～18日	「初冬の谷川岳撮影会」開催　本部・支部共催　参加26名
平成3年（1991）	2月3日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	3月9～10日	「富士山麓撮影会」開催　参加27名
	5月1日	名誉会員中野峻陽氏逝去、享年92
	7月25日～8月7日	三浦敬三写真展「吾が山々への讃歌」開催　コニカフォトギャラリー　大阪（8月）、名古屋（9月）
	9月12～17日	「'91-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル
	10月5～6日	「秋の栂池高原撮影会」開催　本部・支部共催　参加54名
平成4年（1992）	2月2日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	2月27日～3月5日	川口邦雄写真展「氷雪圏」開催　富士フォトサロン　福岡展（5月）、大阪展（8月）
	5月2日	チャンサンラム峰初登頂（チベット・ヒマラヤ6440m、未踏峰） 日中合同登山隊（当会松本支部＝飯沢元啓参加）
	5月14～27日	川口邦雄写真展「地球自然21」開催　コニカフォトギャラリー 名古屋展（6月）、大阪展（7月）、福岡展（8月）
	5月21日～6月3日	津野祐次写真展「中央アルプスの四季」開催　コニカフォトギャラリー名古屋　東京展（6月）
	6月15日～9月30日	川口邦雄写真展「日本の山と人」開催　フランス・シャモニー市、リヨン、マルセイユと巡回
	9月10～15日	「'92-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル　併催＝山のスライドと映画の夕べ

年度（西暦）	月日	
平成4年（1992）	11月28～29日	「晩秋の高峰高原撮影会」開催　本部・支部共催　参加32名
		創立50周年記念出版の『山岳写真のすべて』全国学校図書館協議会選定図書に選ばれる
平成5年（1993）	2月11日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	3月5～18日	関口哲也写真展「北国刻愁」開催　ペンタックスフォーラム　大阪展（4月）
	4月18日～5月9日	穂苅貞雄写真展「梓川―季節の流れのなかで」開催　大町山岳博物館 コニカフォトギャラリー東京展（5月）、大阪展（6月）、名古屋展（6月）、福岡展（7月）
	5月22～23日	「春の谷川岳撮影会」開催　本部・支部共催
	6月18日	北陸支部結成　支部長＝小川春男
	6月24日～7月7日	青野恭典写真展「みちのく光彩」開催　コニカフォトギャラリー　大阪展（7月）、名古屋展（8月）
	9月9～14日	「'93-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル
	10月2～3日	「錦秋の白馬岳撮影会」開催　本部・支部共催
	11月16日	穂苅貞雄氏、秋の叙勲で藍綬褒章を受賞
	12月28日	名誉会員内田耕作氏逝去、享年85
平成6年（1994）	1月21日～2月16日	川口邦雄写真展「地球系」―EARTH DESIGN―開催　コニカフォトギャラリー 福岡展（7月）、大阪展（9月）、名古屋展（10月）、札幌展（12月）
	2月6日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	3月16日	会報の発送業務を業者に委託する
	4月中旬	創立55年記念出版『山岳写真の完成』刊行
	6月11～12日	「春の南ア・白鳳渓谷撮影会」　本部・支部共催
	9月8～13日	「'94-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル
	10月22～23日	「紅葉の高峰高原撮影会」開催　本部・支部共催
	12月23日	サンエイフォトの移転に伴い、協会事務所も、麹町4-5 第8麹町ビル6Fへ移転
平成7年（1995）	1月23日	名誉会員清水武甲氏逝去、享年81
	1月21～22日	「霧氷の美ヶ原撮影会」開催　本部・支部共催
	2月5日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	4月21日	評議員岡田正弘氏逝去、享年61
	6月21日	南信支部設立　支部長＝津野祐次
	9月7～12日	「'95-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル 併催＝山岳写真セミナー、山岳写真何でも相談コーナー
	11月11～12日	「秋の草津白根山撮影会」開催　本部・支部共催
平成8年（1996）	1月12日	名誉会員安彦六郎氏逝去、享年82
	2月4日	総会・新年会開催　サニーサイドホテル
	4月21日～5月12日	穂苅貞雄写真展「アルプス山麓の四季」開催　大町山岳博物館 コニカプラザ新宿・大阪、ジャスコ東松本、アカデミア館
	5月17～18日	「新緑の金峰・みずがき撮影会」開催　本部・支部共催
	8月1日	関西支部設立　支部長＝松村武生
	9月4日	山梨支部長横森見伊氏逝去、享年66
	9月12～17日	「'96-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル 併催＝山岳写真ライブトーク、山岳写真何でも相談コーナー、ミニ機材展
	11月16～17日	「新雪の中央アルプス・千畳敷撮影会」開催　本部・支部共催
平成9年（1997）	2月2日	総会・新年会・（第1回）役員合同会議開催　サニーサイドホテル
	5月31日～6月1日	「新緑の乗鞍高原撮影会」開催　本部・支部共催
	8月16日	評議員秋元常夫氏逝去、享年90
	9月11～16日	「'97-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル
	11月29～30日	「初冬の北八ヶ岳撮影会」開催　本部・支部共催
平成10年（1998）	1月1日	還暦記念にアイランドピーク（ネパール・ヒマラヤ 6160m）登頂（当会北陸支部＝谷村正則参加）
	2月1日	総会・新年会・役員合同会議開催　サニーサイドホテル

年度（西暦）	月日	
平成10年（1998）	6月6～7日	新緑萌える「奥日光高原撮影会」開催　本部・支部共催　参加94名
	7月5日	役員合同会議開催　食糧会館
	9月10～15日	「'98-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル
	10月30～31日	紅葉の「富士山麓撮影会」開催　本部・支部共催
	11月21日	元副会長・名誉会員前田真三氏逝去、享年76
平成11年（1999）	1月23日～2月2日	川口邦雄写真展「氷雪界」開催　東京・新宿コニカプラザ コニカプラザ大阪（3月）、コニカプラザ札幌（4月）
	2月7日	総会開催　東京サニーサイドホテル　総会前に役員合同会議開催
		年会費値上げ　12,000→20,000円　支部へバック 2,000→5,000円
	5月22～23日	「新緑の南アルプス撮影会」開催　参加64名
	6月19日	マッキンリー登頂成功　伊那・デナリ隊（当会南信支部＝福沢勝好参加）
	7月11日	第1回全国支部長会議開催　軽井沢高原ホテル
	7月16～22日	福島延吉写真展「四季燦燦」私の8×10開催　東京・富士フォトサロン
	8月6～30日	青野恭典写真展「みちのく彩時季」開催　酒田市美術館
	9月7日～11月4日	東京都写真美術館総合会館5周年記念展開催 「山を愛する写真家たち」―日本山岳写真の系譜（日本の写真家40人を紹介）。当会からは、 穂苅三寿雄・岡田紅陽・塚本閤治・三浦敬三・内田耕作・船越好文・風見武秀、川口邦雄・平野武利 ら
	9月9～14日	「'99-山・われらをめぐる世界」創立60周年記念展として開催　野村ビル特設ギャラリー
		9月14日、皇太子殿下・雅子妃殿下協会展をご鑑賞
	9月10～16日	橋本勝写真展「カムチャツキーの巨人」開催　東京・富士フォトサロン
	9月11日	創立60周年記念パーティー　京王プラザホテル　参加 会員147名、来賓62名
		60周年記念出版『日本の名山』刊行　信濃毎日新聞社
		60周年記念出版　『山岳写真の魅力』刊行　日本カメラMOOK
	9月21～30日	日本山岳写真協会選抜展「秀岳新世紀展」開催　東京コニカプラザ 大阪コニカプラザ（10月）、札幌コニカプラザ（11月）
平成12年（2000）	2月6日	総会・新年会開催　東京サニーサイドホテル
	9月7～12日	「'00-山・われらをめぐる世界」開催　野村ビル特設ギャラリー
	11月4～5日	「新雪の立山撮影会」開催　北陸支部・本部共催　参加63名
	11月22日	11月例会「ミノルタを招いて」開催　スクワール麹町
平成13年（2001）	2月4日	総会・新年会開催　東京サニーサイドホテル
	6月18日	燕山荘創立80周年記念並びに赤沼淳夫写真集出版記念祝賀会開催
	9月6～11日	「'01-山・われらをめぐる世界」開催　新装なった野村ビル特設ギャラリー
	10月9日	名誉会員船越好文氏逝去、享年92
	11月10～11日	「初冬の奥日光撮影会」開催　参加72名
	12月15日	新しい事務所へ引っ越し（サンエイフォトの間借りから、番町ハイムの315号室へ）
平成14年（2002）	1月25日～3月29日	国際山岳年写真展「世界の山嶺に息づく」開催　UNU・UNギャラリー（協会会員24名による） 好評により4月26日まで延長される
	2月3日	総会・新年会開催　東京サニーサイドホテル
	3月4～7日	TOKYO FMのコスモアースコンシャスアクトで会員4名がメッセージを放送 風見武秀、川口邦雄、青野恭典、羽田栄治
	6月1日	青野恭典フォトアートギャラリーオープン（伊那谷かんてんぱぱガーデン内）
	9月5～18日	「'02-山・われらをめぐる世界」開催　この年から公募を始める（2会場で開催） 野村ビルギャラリー（9月5～10日）、コニカプラザ（9月10～18日）
	10月11～17日	風見武秀写真展「世界の山」開催　富士フォトサロン（写真集も同時出版）
	10月31日	風見武秀氏の米寿と出版を祝う会開催　グランドヒル市ヶ谷
	11月30日～12月1日	樹氷の千畳敷カール撮影会開催　参加110名
平成15年（2003）	2月2日	総会・新年会開催　東京サニーサイドホテル

年度（西暦）	月日	
平成15年（2003）	2月19日	三浦敬三氏、白寿を記念して親子3世代のヨーロッパ・アルプス大滑降に成功
	8月2～3日	「高山植物咲き乱れる伊吹山」撮影会開催　参加78名
	9月7～13日	「'03-山・われらをめぐる世界」開催　東京交通会館 ゴールドサロン・ギャラリー玻璃
	9月	パソコン購入
	12月10～19日	日本山岳写真協会選抜展「それぞれの山」開催（各人の組写真で12名）　コニカミノルタプラザ
	12月20日	風見武秀会長逝去、享年89
平成16年（2004）	1月18日	緊急臨時役員会開催　食糧会館（川口邦雄氏の会長就任を承認）
	2月1日	総会・新年会開催　ルートイン東京・東陽町
	2月21日	東海支部長服部政信氏逝去、享年79
	5月29～30日	「新緑の高峰高原」撮影会開催　参加72名
	9月3～9日	「'04-山・われらをめぐる世界」開催　富士フォトサロン　スペース1・スペース2
	9月4日	創立65周年記念写真展祝賀会開催　昭和un-mi 本店
		創立65周年記念出版『山岳写真の上達技法』刊行
	12月10～17日	選抜展「水の変幻」開催　コニカミノルタプラザ
平成17年（2005）	2月6日	総会・新年会開催　ルートイン東京・東陽町
	2月11日	協会事務所移転（同じビルの637号室へ）
	3月8～13日	創立65周年記念「京都展」「京都フォーラム」　開催
	9月2～8日	「'05-山・われらをめぐる世界」開催　富士フォトサロン　スペース1
	9月4～10日	「'05-山・われらをめぐる世界」開催　東京交通会館ゴールドサロン
	10月29～30日	「紅葉の富士北麓」撮影会開催　参加42名
	12月10～19日	選抜展「それぞれの山」開催
平成18年（2006）	1月5日	名誉会員三浦敬三氏逝去、享年101
	2月5日	総会・新年会開催　ルートイン東京・東陽町
	9月1～7日	「'06-山・われらをめぐる世界」開催　富士フォトサロン　スペース1・2
	11月4～5日	「新雪の立山」撮影会開催　北陸支部・本部共催　参加74名
	12月12～19日	選抜展「それぞれの山」開催　コニカミノルタプラザ
平成19年（2007）	2月4日	総会・新年会開催　ルートイン東京・東陽町
	5月23日	名誉会員飯島道人氏逝去
	6月28日	名誉会員小林治国氏逝去、享年89
	8月4～6日	「燕岳撮影会」開催　参加41名
	8月31日～9月6日	「'07-山・われらをめぐる世界」開催　富士フォトサロン（六本木 東京ミッドタウン）
	11月17～18日	「晩秋の美ヶ原高原」撮影会開催　参加45名
	12月11～19日	選抜展「それぞれの山」開催　コニカミノルタプラザ
平成20年（2008）	2月3日	総会・新年会開催　ルートイン東京・東陽町
	9月5～11日	「'08-山・われらをめぐる世界」開催　富士フォトサロン（六本木 東京ミッドタウン）
	11月15～16日	「初冬の奥日光撮影会」開催　参加85名
	12月19～26日	選抜展「それぞれの山」開催　コニカミノルタプラザ
平成21年（2009）	2月1日	総会・新年会開催　ルートイン東京・東陽町 羽田栄治氏の会長就任を承認（川口邦雄氏は名誉会長に）
	9月11～17日	「'09-山・われらをめぐる世界」開催　富士フォトサロン（六本木 東京ミッドタウン）
		創立70周年記念出版『日本の花名山』・『美山彩嶺』・『山岳写真の探究』・ 『目で見る日本山岳写真協会の70年』を刊行
	9月13日	創立70周年記念式典及び祝賀会開催　ホテル「はあといん乃木坂」
	10月17～18日	「錦秋の南アルプス」撮影会開催予定　南信支部・本部共催
	12月22～28日	選抜展「それぞれの山」開催予定　コニカミノルタプラザ

編集後記

本冊子は、協会70年の歴史をビジュアルで辿るものである。この企画をまとめるに当たり、先ず構成を立案しそれを叩き台として写真の収集を始めてみた。、昭和50年代から現在までの写真には不足はなかったが、戦前そして戦後10年までの写真は、ほとんど手元に残っていない。それに、創立会員のほとんどの方は鬼籍の人となったので往時を知る時代の証人は稀有に等しい。

幸い、生前、風見武秀先生（元会長）から創立時の写真を見せて頂いた記憶があったので、是非利用させて欲しいと久代夫人にお願いしたところ快諾して頂き、改めて感謝申し上げたい。

さて、写真は過去が撮れない。過去の現実の中で撮った一枚の写真は、今ではフィルムアーカイブスとなって時代を記憶している。このような意味でも一枚の写真の持つ記録性を改めて痛感するものである。７０年の歴史を限られた頁でまとめるわけだが、写真の選択、本文や写真説明は任せて頂くものとしても、誤りがあればご指摘頂き参考としたい。編集に当たり大変なご協力を頂いた風見久代夫人を始め、創立会員の内田耕作さんのご子息・内田亮さん、川口邦雄元会長、現役で最も古い中野慶一監事、市場新太郎副会長には協会史と言う年表をまとめて頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。編集作業に、急をもって出版作業を進めて頂いたデナリパブリッシング社の森田洋さん（元山と溪谷社編集長）にも大変お世話になり、末尾ながらお礼を申し上げたい。

編集委員代表　羽田栄治

目で見る日本山岳写真協会の70年

The 70th ANNIVERSARY of Japan Alpine Photographers Association

平成21年9月11日発行

制　　作　日本山岳写真協会70周年記念委員会

発　　行　日本山岳写真協会
〒102-0084　東京都千代田区二番町1　番町ハイム637
TEL･FAX03-3261-3292
http://www13.ocn.ne.jp/~japahonb/

編集協力　デナリパブリッシング株式会社
〒102-0093　東京都千代田区平河町2-4-13
ノーブルコート平河町203
TEL03-5213-8125　FAX03-3237-1681
http://www.denali-p.co.jp/

デザイン　松﨑　稔

印刷･製本　株式会社シナノパブリッシングプレス
〒171-0014　東京都豊島区池袋4-32-8

本書掲載の記事･写真等について無断転載･複製を禁じます。